

第54回造本装幀コンクール 受賞者インタビュー

日本書籍出版協会理事長賞：『怪物園』

出版社

福音館書店 担当編集者 岡田 望 氏

装幀者

cozfish 祖父江 慎 氏、藤井 瑤 氏

印刷会社

図書印刷

製本会社

大村製本

代表取締役社長 齋藤和明 氏、係長 大津拓也 氏



©佐藤祐介

●御社の活動について教えてください。

福音館 岡田（以下岡田）：絵本や読みものなど、児童書を出版しています。

cozfish 祖父江 藤井（以下cozfish）：書籍や展覧会、グッズなどのデザインを多く手がけています。

大村製本 齋藤 大津：（以下大村）【相談できる製本屋】というキャッチフレーズを掲げ、お客さまのご要望にお応えしております。1冊の本から大ロット本、特殊装丁本、小さな本から大きな本、合本・切り替えなどの様々な仕様を納期、価格、品質などいろいろな視点から最適なつくり方、代替案などをご提案させていただき、ものを作っております。

様々な仕様に対応するため独自の最新設備を導入しております。またその一方で、50年以上前から大切に使用している古い機械もあります。新しい機械と古い機械を融合させ、人間のアイデアで製品の幅を広げています。社内の合言葉は「やせ我慢をしてもとにかくやってみる」。様々な製品は過去の失敗や予想外の出来事の上に成り立っています。気が付けば60余年【相談できる製本屋】としてお客様に育て続けていただいているのが大村製本です。

図書印刷（以下図書）：図書印刷は、印刷技術を核として幅広いサービス・製品を提供し、お客様のコミュニケーションを支援しております。販促・広報分野では企業と消費者、出版メディア分野では書き手と読み手の間のコミュニケーションを、紙もデジタルも含めてまるごとデザインし、お客様の課題解決を行っていきます。

●今回の作品のような造本にされたのは、どういっ

た経緯があったのでしょうか。

cozfish: 著者であるjunaidaさんとの打ち合わせを通して、第一印象では王道の絵本らしいクラシックな貌をもちながら、いつの時代に・どの国で生まれたのかが曖昧な、不思議な存在感の絵本になることを目指しました。



岡田：表紙にも描かれ、物語の軸となる怪物たちの行進を「夜」のイメージとともに、どう表現し読者に印象づけるか、それと対をなす子どもたちの世界との対比をどう際立たせるのか、junaidaさんの作品世界のイメージを本というかたちで具体化するにはどうすればいいのか、そんなことを相談しながら、造本のイメージを固めていきました。

大村：日頃、福音館さまから特殊な本のご相談をお受けしている経緯で今回ご相談をいただきまし

た。表紙から見返しまでの絵がつながるというデザインを実現させるためにはどうしたらいいかを試行錯誤しました。

●受賞の知らせの感想をお聞かせください。

cozfish:『怪物園』が多くの方の手に届くきっかけとなり嬉しいです。

岡田:すでに『怪物園』を手にとってくださった読者のみなさんが、実は作品の内容と切っても切り離せない造本という観点から、改めて本を見てくださるとうれしなあと思います。

大村:細部にまでこだわって製本した本でしたので受賞の連絡をいただいた時の喜びは格別でした。関係者の方々とやり取り、現場での試行錯誤や苦勞が喜びに昇華した瞬間でした！

●作品制作において、こだわった点、苦勞した点を教えてください。

岡田:見返しの用紙、色の出方、表紙から続く絵柄の連続性、表紙の背景の黒の表現、透明箔の精度などなど、造本が物語と一体となり、具体的に「形」として物語がそこに立ち現れるためにはどうすればいいかということ、作者、印刷会社、製本所、デザイナー、版元がそれぞれの立場、役割において突き詰め、ぎりぎりの段階までテストと試行錯誤を重ねて最善を模索しました。

図書:『見返し』印刷です。福音館書店様、作者様、デザイナー様のご提案により、比較的濃い色合いの色紙を使用した見返しに絵柄を印刷しております。イメージとして掲げられていた「暗闇の中の行進」を表現するために「見え過ぎず、かつ見えなさ過ぎず」を大切にしながら印刷を行いました。



cozfish:真っ黒な中に怪物たちが浮かび上がる見返しは、何種類もの紙をテストする中で最も想像

がつかない仕上がりでした。junaidaさんご本人の「絵は見えなくても大丈夫」ということばに後押しされて実現することができました！

大村:『怪物園』は造本上、一見なんの変哲もない中ミシン上製本（絵本）ですが【怪物たちの行進】の絵が表2→表1→表4→表3へつながっています。また見返しと本文最初扉ページの絵柄も見開きでつながっています。全ての絵柄をきっちりとつなげるためには、表紙、見返し、本文の3つの接続部分のズレを最小限にしなければなりません。実際製本を行う前には絵柄のつながりをより緻密に確認し校正する為、校正紙で手製本、さらに本番同様実機テストも含め計17通り程の試作を重ねました。これでしっかりと合う！という自信のもとデザインが確定しました。



実際の作業は表紙の断裁、貼り、見返しの断裁、折、本文の断裁、折、丁合、縫い、仕上げ断裁と全ての工程がこの【絵のつながり】【怪物たちの行進】の実現に向け微調整を繰り返して製本しました。

機械の力のみに頼ってはいは求める精度を出すことが出来ません。各工程オペレーターの想像力と連携、工程全体を見渡す人間の役割がとても重要になってきます。

表紙と本文を付けるクルミ工程では本文のクセ、表紙の誤差など刻々と変わる品物に合わせ、機械出口で細心の注意を払ってチェックをし、ズレを微調整し続け製本しました。本の中心となっている【怪物たちの行進】を造本の面から実現する！

という意気込みで挑んだとても感慨深い作品です。

●一般の方には「造本」という言葉になじみがないかもしれませんが、「“造本”の観点から、本を視る」ポイントがあったら教えてください。

また、電子書籍が広がる中で、紙の本への思いや良さなど、お聞かせください。

岡田：紙の本という形は、何かを読むための道具として本当に完成されていると思いますが、何より魅力的でおもしろいなあと思うのは、紙の本を形作っているそのすべてが異なった手触りを持ち、質量があるということ。紙や糸やあるいは様々な加工といったもののだけでなく、2次元として認識し、意味や情報として受け止めている印刷された文字、色、絵にも、手触りや質量があることです。ですから、紙の本を読んで、心を動かされたとき、その心を動かした何かが確かにそこにあるという実感が強く伴い、読んだ本が長く深く自分の中にとどまり続けるような気がします。最終目かもしれませんが。



cozfish: 紙の本は重さや手触りや大きさを持ち、すでに在る、という物質感が魅力だと思います。印刷された途端定着してできあがってしまうことの不自由さやいびつさも含めて、そのものとの関わりを考えていけるところが面白いです。

大村：本は字、絵、写真など様々な情報を扱っていますが物体として見ていくとまた違った面白さが出てくると思います。大きさ、縦横比、紙の厚さ、手触り、重さ、開きやすさ、頑丈さ、価格、様々な作り手のこだわりが本には形となって現れます。例えば、価格を抑えることで沢山の人に広まりやすくした造本、とにかく製作日数がなく早く仕上げるための造本、世界でたった一冊の超こだわりの造本、子供がめくりやすい造本、100年先

も頑丈でこわれない造本・・・造本には様々な理由とそれを実現するための試行錯誤、取捨選択が行われます。堅牢性や価格、見た目などで優劣をつけるものではありません。

すべての造本に長所と短所があって性格も表現方法もバラバラ・・・まさに人間そのものの様です。そんな本たちの見てくれから背景に想いを巡らせてみると、その本に対する見方も変わって楽しみも増えてくるのではないのでしょうか。

図書：人には五感というものがあります。その中でもひとの手に触れる「触感」の部分は、紙の本ならではの味わいがあると思います。言葉で感覚を表現しやすいもの、何とも言い難いが何か気になるもの等、様々な「触感」を味わう事ができると思います。これからも人の五感に響くような作品（紙の本）が後世に残されていく事は大切なことだと思います。（了）



※作品紹介動画はこちらからご覧いただけます。